

第 33 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

本委員会は、応募期間中の 2008 年 5 月 8 日札幌市内で委員会を開催し応募状況を確認したうえで、支部主催の「建築作品発表会」他から委員推薦候補作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

本年度の第一回審査会は、全委員参加のもと 5 月 28 日に札幌市内で開催され、全委員同意の下に以下の審査対象 16 作品を確定した。応募作品及び応募設計者（順不同）：

- ①中富良野保育園（西島正樹君／プライム一級建築士事務所）
- ②サッポロアパートメント（納谷 学君他／納谷建築設計事務所）
- ③積丹町立余別小学校― 小集落のり・デザイン第Ⅱ期― （井端明男君／㈱アトリエアク）
- ④レストランテ／トレノ（福島慶介君他／㈱福島工務店）
- ⑤読売新聞大曲工場（米田浩二君他／鹿島建設㈱建築設計本部）
- ⑥㈱モーニング新社屋（川口英俊君／㈱アーキテクト・キューブ）
- ⑦糸賀整形外科クリニック新築工事（川口英俊君／㈱アーキテクト・キューブ）
- ⑧龍香洞（谷口大造君他／スタジオトポス）
- ⑨五稜郭タワー（佐波俊二君他／清水建設㈱）
- ⑩札幌市山口斎場（平井裕彦君他／㈱山下設計）
- ⑪黒松内中学校エコ改修（加藤 誠君／㈱アトリエブク）
- ⑫六書堂新社屋「ときの杜～ forest in time」（畠中秀幸君／スタジオ・シンフォニカ(有)）
- ⑬ J Aびえいアグリパーク「美瑛選果」（鈴木 理君他／㈱鈴木理アトリエ）
- ⑭サッポロビール博物館・サッポロビール園（久保勝彦君他／大成建設㈱）
- ⑮小さな老人ホーム「かぎぐるま」（小倉寛征君／エスエーデザインオフィス）
- ⑯砂川市地域交流センター ゆう 及び 砂川駅自由通路（弓良芳雄君他／㈱北海道日建設計）

引き続き第一次書類審査に移り、現地審査対象作品が選考された。最初に、作品選考審査の方法として、多数決ではなく議論を通じて全委員の同意を得ること、その評価の視点は、コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」、時間・空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」、それらを統合して美の創造を目指す「洗練度」、とすることを再確認した。

各委員の個別評価と活発な議論の末に、現地審査該当作品として、③積丹町立余別小学校― 小集落のり・デザイン第Ⅱ期―、⑪黒松内中学校エコ改修、⑬ J Aびえいアグリパーク「美瑛

選果」、⑭サッポロビール博物館・サッポロビール園、⑮小さな老人ホーム「かざぐるま」、⑯砂川市地域交流センターゆう 及び 砂川駅自由通路の 6 作品（順不同）が選定された。

現地審査は委員 7 名全員の参加を原則として 3 回に分けて実施された。7 月 10 日に第 1 回、③積丹町立余別小学校と⑩黒松内中学校エコ改修。7 月 15 日に 第 2 回、⑭サッポロビール博物館・サッポロビール園。8 月 28 日に第 3 回、⑬ J A びえいアグリパーク「美瑛選果」および⑮小さな老人ホーム「かざぐるま」、⑯砂川市地域交流センターゆう 及び砂川駅自由通路。いずれも天候に恵まれ、周辺環境から建築空間の内外まで詳細に観察し、設計者やクライアントとの意見交換を含めて有意義な現地審査となった。

第二回審査会は 9 月 9 日、全委員出席のもと札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。審査に先立ち次のことを確認した。計画および設計に関与した委員は、当該作品に対する見解表明を避け個別討議の際には座を外す。選考審査は、各委員が作品に関する見解を述べたのち、作品ごとの自由討議に移り多角的視点から活発で真剣な議論がおこなわれた。

これまで述べた一連の選考審査を経て、個々の作品の評価と意義が整理され、本委員会の総意として北海道建築賞および同奨励賞について以下の決定をした。

- 北海道建築賞に「黒松内中学校エコ改修」加藤 誠君／(株)アトリエブク
- 北海道建築奨励賞は該当作品なし

現地審査 6 作品のうち 5 作品は残念な結果となったがいずれも佳作劣作であり、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

●積丹町立余別小学校— 小集落のリ・デザイン第Ⅱ期— :

漁業で栄えた歴史ある小集落の核として小学校と町民センターを統合し、旧校地を多目的なコミュニティ空間に再構築したプログラムと設計手法はその先進性と規範性の観点から高い評価を得た。特に小学校内部は町民の利便性も考慮した綿密な空間構成が、小規模の利点を生かした上質な大きな家的空間を創出した。一方、建築として一体である旧体育館を再利用した町民センターが、町の別設計によるためかプログラム意図を十分表現できず残念な結果となった。

● J A びえいアグリパーク「美瑛選果」:

国道沿いにフランスレストランと農産物直販コーナーを併設する企画を、外部空間によって分節化した単純な平面計画、均質化された大きなガラス開口と壁面の 構成によってモダンで端正な佇まいの建築に結実させたデザイン性は高く評価された。一方、二つの主用途に挟まれた中央ゾーンの空虚感、レストランアプローチの不自然さ、共通パーキングエリアに緩衝空間なし

に併置された前面外部テラスのあり方などに問題が指摘された。

●サッポロビール博物館・サッポロビール園：

明治23年築の重厚な煉瓦造建築を活用した博物館正面に新築された低層のガーデングリルは、周囲の緑地に映える現代建築として博物館と好対照をなし、互いに響きあって札幌らしい園内景観を創出している。しかし、博物館裏の増築部分は、歴史的景観保持を目的に採用された一部黒塗り外装タイルや非対称勾配破風などの擬似景観復元手法が、文化財としての博物館建築の品格を欠く結果となっていることが指摘された。

●小さな老人ホーム「かざぐるま」：

特殊養護施設の小規模サテライトとして既存住宅地の一角に新設された。利用者に対するバリアフリーを確立するために近隣に対して細やかに配慮された配置計画と外観デザインには高い規範性が認められ、住宅設計の手法で丁寧に構成された内部計画には先進性が感じられた。一方、全体的に建築表現としての新規性と洗練さが未成熟とされた。

●砂川市地域交流センターゆう 及び 砂川駅自由通路：

砂川駅東部開発の中核施設として計画された交流センターは、70m超の吹抜け大空間「交流スペース」と本格的劇場機能を持った「多目的ホール」を核とした大規模な公共建築である。前面広場に対し、交流スペースは1階部分が全面ガラス開放だが上部は長大な連続壁体となって重苦しく、施設全体としても外に閉じた硬い感じの外観となっている。多様な設計条件への解として計画された交流スペースだが、ヒューマンスケールを超えた構造空間はイベント時には有効に機能しても、日常性の中ではスケールアウトの危険性をはらんでいる。自由通路との視覚的空間的連続性を含めて公共建築としての豊かな日常性への疑問が指摘された。

(文責：大萱昭芳)

第33回 北海道建築賞

加藤 誠 君 「黒松内中学校エコ改修」の設計

少子化の進行に伴う学齢人口の減少は小中学校の教育現場と地域に深刻な影響を及ぼしている。かつての施設規模を維持できず、全国的に校舎と学区の統廃合が進められているが、小中学校はさまざまな年中行事を通して地域コミュニティを支える社会基盤システムの中核だった。一方、地球規模では熱環境変動と化石燃料ピークアウトを視野に低炭素社会の構築が急務となってきた。

このような社会状況を背景に、「黒松内中学校エコ改修」プロジェクトが始まり、1年間の2つのプログラム、地域住民・生徒・教職員への「環境教育検討会」と建築技術者への「エコ改修検討会」への参加が設計プロポーザルの必要条件として示された。この実験的な先行プログラムは度重なるワークショップを通じて、エコ改修プロジェクトの目的と意義を関係者全員の共通認識に高め、成功に向けての強い原動力となった。

設計者はこのプロセスの中で、「ひかりのみち」による「大きな家」のコンセプトを育み、地方の学校建築がかかえる消費エネルギーの削減・耐震化・老朽化・人口減による機能再編という普遍的テーマに対し、黒松内の自然風土と既存校舎の特殊性の解析によって建築的特殊解を導いた。このことは、20世紀文明の脆弱性に対する解は文化的アプローチに内在することを暗示している。

「ひかりのみち」は3スパン中央部のスラブを撤去した東西に連続する吹抜け空間で、北に傾斜したガラス屋根からの柔和な天空光で満たされている。「大きな家」を象徴する乳白色に輝くガラス屋根は、細身の鋼管で構成された三角錐形の3Dトラス梁で均質に支持され、リズムカルで軽やかな視覚効果を生んでいる。1階は特殊教室群と管理部門の前庭として授業中や放課後、生徒と教職員、時には町民によって多様な光景が展開され、2階は一般教室としての静けさを保ちながら、両面採光による均一な光環境がガラス屋根からの天空光によって実現している。

風土特性を生かした自然採光と自然通風および外断熱の徹底による暖房負荷の低減によって消費エネルギーの大幅な削減を達成。「ひかりのみち」で撤去された躯体荷重減による耐震性の向上。外断熱の躯体温度保持による耐久性の向上と修繕費の低減。生徒数減少による機能再編によって創出した豊かな学校生活空間。部分的に壁面テクスチャとして残した解体時の痕跡は記憶を呼び戻す歴史の残像。一変した建築環境は室温や照度、風量などに関心を呼びおこし、

生徒による数値測定が日常化した姿は理想的な科学教育。

「黒松内中学校エコ改修」は改修でしか得られない建築空間を具現化した秀作である。その手法が示す普遍性は極めて高い先進性と規範性を有し、建築における新分野を開拓した。新築以上に労の多い改修において、明確なコンセプトのもと細部にまで挑戦し続けた建築家魂に敬意を表するとともに、建築としての洗練度の高さに賛辞を送る。

(文責：大萱昭芳)